

植民地時代と現在：国家の教育，村の学校 パプアニューギニア ナカナイ族の小学校

著者	山路 勝彦
雑誌名	国立民族学博物館研究報告別冊
巻	021
ページ	197-212
発行年	2000-03-21
その他のタイトル	Colonial Days and the Present : Education Policy and a Rural Elementary School: A Case Study from the Nakanai of Papua New Guinea
URL	http://doi.org/10.15021/00003512

国家の教育, 村の学校

——パプアニューギニア ナカナイ族の小学校——

山 路 勝 彦*

はじめに

I ナカナイ族とその近況

II 制度としての学校の沿革

III 学校のカリキュラム

IV 国家の教育, 村の学校

おわりに

はじめに

パプアニューギニアの国家体制は、よく知られているように地方分権制度に基づいていて、国家を形成する19の州には政策決定のうえで多くの権限が委譲されている。しかしながら、小学校などの学校教育は中央の政策のもとで運営されていて、国家を単位とした統制下に置かれている。教員の養成と資格付与、教員の給与体系、カリキュラムの決定など、主要な事項は国家の管轄する権限に属している (Bray 1984)。多くの国と同じように、国家建設の基盤作りに青少年の育成が位置つけられているからで、パプアニューギニアでも学校教育はその一翼を担っている。とはいっても、学校制度そのものが西欧からの制度的輸入であるからして、いくつもの難問題を抱えることになる。1974年にポートモレスビーで開催された第8回ワイガニ・セミナーでは、教育理念や教授法、あるいは地域社会における学校教育など、多彩な面にわたってこの国が抱える教育上の諸問題が討論された (Brammal & May 1975)。

それから10年たち、社会的・経済的変化に応じて、学校教育が近代的な知識と技能を授ける機関として定着してくると、教育をめぐる議論も多様な側面で深化してくる。大学教育を含めエリート養成の問題や近代的職種の獲得と教育の関わり具合など、現代社会の抱える問題が提起されてもくる。例えば、パプアニューギニア大学教育学部

* 関西学院大学社会学部

Key Words : Nakanai, elementary school, curriculum, English education, modernity and tradition

キーワード：ナカナイ族、小学校教育、カリキュラム、英語教育、近代と伝統

の研究会で議論される題目も、このような現代的関心に裏打ちされていた (Bray & Smith 1985)。しかしながら、90年代に筆者がパプアニューギニアの一地方、西ニューブリテン州で実見した現実、伝統と近代の相克を交えつつ、学校教育が未だ定着していない状況であった。その現実、一面では国家形成の難題を突きつけているようでもあった。以下の議論は、筆者が試みた野外調査に基づき、西ニューブリテン州のナカナイ族の小学校を取り上げ、その教育内容、そして地域社会との関わりを論じる試みである。

I ナカナイ族とその近況

パプアニューギニアのすべての地域がそうであるように、西ニューブリテン州でも多様な言語集団が共住する地域である。公式文書でナカナイ族と表記される集団、あるいはロソと自称する集団はそのなかの一つである。それは、言語学的にはオーストロネシア語族に属し、アウカ、マウトト、ビレキという方言群を抱えもつ比較的少数の集団であって、それぞれは数十から百キロメートルと、互いかけ離れた地域に住んでいて、しかもそれぞれの周囲にはまったく異なる、非オーストロネシア系統の言語集団が取り囲んでいるという複雑な環境に置かれている。

最初に、この論稿の主人公であるアウカ系住民の認識している周辺の言語集団を列挙してみたい。

ナカナイ Nakanai 族 (ただし自称はロソ Roso 族) :

ビレキ Bireki

アウカ Auka

マウトットゥ Maututu

マンセン Manseng 族 : アヴェレ Avere

アタ Ata 族 : ワシ Wasi

マムシ Mamusi 族 : サ Sa

このうち、ナカナイ、マンセン、アタ、マムシは「人々 (アヴァラルワ *avararu-wa*)」を指す言葉で、エスニック集団に該当する。これに対して、ビレキ、アウカ、マウトットゥ、アヴェレ、ワシ、サは、すべて「否 (つまり英語のノー、No)」の意味であるが、通例は言語 (アヴァカララ *avakarara*)、もしくは方言の分別に従って

彼らは呼び慣わされていて、その時に用いられる名称である。これらの集団は、現在では多くが山間部から街道沿いに移住してきて、なかには一つの村にいくつかの言語集団が共住する場合も見られるようになった。しかし、かつては言語集団ごとに領域を区別し、通婚さえも稀であった。この移住の契機には、キリスト教の布教が関係している。

この地域でキリスト教の二大勢力、カトリックとメソジストの教派が布教活動を開始したのは、両大戦間である。初期のうち、宣教師たちは山奥での活動を余儀なくされたが、1940年代後半に至ると、教会関係者は布教の実をあげるため、人々に説いて、街道沿いに移住し宗派の同一性をもとにした集住村落を形成するよう促した。こうして、複数の言語集団を抱え込む集落が随所に見られるようになり、現在では相互の通婚も行われる状況になった。

こうした居住地の移動の後に、近年では人々の生活様式も大きく変わった。一つの象徴的現象として出産慣行を取り上げれば、60歳代以上の女はブッシュで子生みをした経験を持っているが、その娘以降の世代では出産はもっぱら病院での営みである。昔ながらの生業といえば、タロ、ヤム、そしてサツマイモなどの芋栽培であり、この限りでは以前は自給自足的な農業が中心であった。ところが、道路網の整備、そして市場経済の浸透は農業のあり方を変え、比較的最近ではパームオイル、カカオなど換金作物の栽培が始まっている。州政府も農地の貸与を行い、村人にパームオイルなどの栽培を奨励する。こうして現金収入の道が開かれると同時に、米、缶づめ、ビール、そして洗剤などの日用品が大量に流入するようになり、各村には小規模な自営的な小売り店も現れる。とはいっても、州都のキンベ近郊に見られる大規模なプランテーション農業と比べると、個人単位の零細農業の域を出ない実状は否定できない。その状況は、市場経済への離陸は端緒についたばかりと言ったほうが適切である。

II 制度としての学校の沿革

パプアニューギニアでの学校教育は、すべての近代的な国民国家と同じく、国家機関の一翼を担っている。現在（1994年以降）では8年制のプライマリー・スクール（primary school）という名称が、それ以前は6年制のコミュニティ・スクール（community school）という名称が与えられていた学校は、言うまでもなく国家が管掌する教育制度である。この制度が確立される以前、あるいは確立された後でも辺ぴな山間部では、子どもたちの教育はキリスト教会の布教活動の一環として、村ごと

の教会が中心になり、ビレッジ・スクール *village school* という名称の施設で行われていた。もちろん組織的にカリキュラムを組むことはなく、算数などの簡便な実利的知識を教授することが中心であった。同時に聖書の講話も主要な目的であった。教材は英語の出版物を利用していたが、生徒の能力に合わせ、ナカナイ語とピジン語との併用が試みられていた。パプアニューギニアが独立国家として誕生する以前、山間部に住むナカナイ族アウカ方言群での教育活動を村落ごとに概括してみたい。

ビビシ Bibisi 村：

山間部にあったこの村では、1960年にメソジスト教会が「ビビシ・ヴィレッジスクール」を設立し、この学校は62年まで続いていた。簡便な英語のテキストを宣教師や地元の識者がナカナイ語に訳して子どもたちに教えていた。数学、保健、農業などの実利科目を教えるとともに、聖書などの宗教も講話していた。時として宣教師はトーライ語も交え、聖書の話をしていった。というのも、この地域での布教活動は、トーライ族の住むラバウルを本拠地としていたからである。

ウム Umu 村：

やはり山間部にあったこの村には、1963年にメソジスト教会によって「ウム・ヴィレッジスクール」が設立され、翌年まで開校されていた。オーストラリアで出版された英語の本を教材とし、宣教師や村の有識者が中心となってナカナイ語、ピジン語を用いて授業していた。この村は、地震の被害のため、80年代に次に述べるワシラオ村の隣りに移住している。

ワシラオ Uasilao 村：

大戦後に建立されたワシラオ村は、アウカ系統とアタ系統のメソジスト教徒が共同して建設した村である。1957年に「ワシラオ・ヴィレッジスクール」が設立された。街道沿いに建立されたため生活の便利さがあり、その後ウム村を含め、他のアウカ系統の人たちもこの近隣に移住して来る。70年代にワシラオ・コミュニティ・スクールが公的教育機関として設立されると、近隣の村落も校区にもち、こうしてアタ系とアウカ系との複数の言語から構成される複雑な構成になった。

このワシラオ小学校は、その後この地域の教育機関として中心的な役割を果たしていく²⁾。もっともこの学校自体は、1994年に新たに学制改革として再編された8年制のプライマリー・スクールが近隣村に登場することによって廃校になったが³⁾、それまではこの地区の学校教育の拠点であった。ワシラオ小学校の特色は、教師と生徒と

の双方が多言語的に構成されていることにあり、その意味では典型的なパプアニューギニアの学校，そのものであった。そこで、この学校に焦点を絞り、学校のあり方、例えば教育内容と方法を通してパプアニューギニアが抱える諸問題、すなわち、地域生活と国家との関係を考えていきたい。

最初に教員の横顔を紹介しておきたい。ワシラオ小学校の校長（現在はラロボ小学校長）は、山奥に住むアウカ系統の村に生まれた40歳代後半の人物である。彼は、末端部での行政的権限は持っていないが、近代的教育を受けた知識人として村落では声望を集めている人物である。個人的力量によって富を築き、その富を村人に分配することによって政治力を発揮するという伝統的なメラネシア型とは異なったタイプの指導者として、村落の諸行事では発言力を持っている。メソジストの伝道者であった父の影響でキリスト教の素養を幼くして身に付けた彼は、成長してラバウル市のカレッジを卒業し、教員になったという経歴を持っている。この略歴が示すように、彼はキリスト教の伝統と英語での教養を身に付けた新しい型の知的指導者の一員である。

生徒の場合と同じように、教員の出身地もまた変異に富んでいて、アウカ系統のこの校長のほかに、アタ系、同じナカナイ族のピレキ系、そしてブーゲンヴィル島などパプアニューギニアの他の地域の出身者と、多様な言語集団の出身者で構成されている。これから類推されるように、多民族国家としてのパプアニューギニアでは複雑な教育問題が生じる。生徒と教員との双方がともに複数の言語使用者から構成されているという事情は、後にみるように学校での教授方法、そして生徒の学習態度などに複雑な状況を作り出している。

Ⅲ 学校のカリキュラム

パプアニューギニアの学校制度は、90年代前半では6学年制の小学校 community school をもち、この小学校卒業者には4学年制の中学校 (provincial high school) が開かれていた。他の地域と同じくワシラオ小学校は2学期制で、第1学期は1月末に始まり6月末に終わり、2週間の休暇を挟んで、第2学期は7月第2週に始まり12月上旬に終わる。学校は月曜日から金曜日までの週五日制で、日課は朝の7時45分から校庭での国旗掲揚、国歌合唱で始まる。それらはまさしく国家による儀礼行為にはかならず、このような儀礼行為からも学校教育が新興独立国家パプアニューギニアの国家意識を高揚する契機として位置づけられているのを知ることができる。

科目目を主体とした授業は8時から開始される。もちろん学年ごとに授業科目、そ

して時間割は異なるが、全学年を通じて言えることは、近代的な科学的知識を生徒に付与するのが主要目的であると同時に、英語教育と宗教教育との比重が大きいという特色がある。表1で例示するのは第4学年の時間割であるが、カリキュラムの組み方は全学年を通して基本的には同じ特徴が認められる。

この時間割通りに授業が進行するのではないが、学校側として生徒に何を教授しようとしているかは、この表1から分かる。まず第一の特色として、英語学習の比率が高いことが指摘される。時間割でリーディング、リスニング、ライティングなどと記されている科目は「英語」についてであり、「読み」、「話す」、「聞く」、ことに力点が

表1 ワシラオ小学校の時間割（4学年）

	Mon.	Tue.	Wed.	Thu.	Fri.
7.45- 8.00	assembly	assembly	assembly	assembly	school
8.00- 8.15	reading	reading	reading	reading	devotion
8.15- 8.30					reading
8.30- 8.45	macs	listening	oral expr.	oral expr.	
8.45- 9.00		let's speak English			
9.00- 9.05	b/cast				
9.05- 9.20	spelling	spelling	spelling	spelling	sp/dict.
9.20- 9.40	talking	talking	talking	talking	talking
9.40-10.00	writing	writing	writing	writing	writing
10.00-10.15	recess				
10.15-10.30	Christian education				reading
10.30-10.45					
10.45-11.00	writing	oral expr	writing	science	listening
11.00-11.30	macs	macs	macs		phy.edu.
11.30-12.00	com.life	phy.edu.	phy.edu	phy.edu.	
12.00-12.30	lunch				
12.30- 1.00	macs	macs	w/comp.	macs	exp. art
1.00- 1.30	com.life	exp.art	com.life	health	agricul.
1.30- 2.00					

注) 略記号説明

b/cast=broad cast, com.life=community life

w/comp=writing composition, exp. art=expressive art

oral expr=oral expression, phy. edu=physical education

置かれている。英語の時間数は合計で670時間で、総時間数1,650のうち、4割を占めていることから、その比重の高さが分かる。イギリス、そしてオーストラリアの植民地であったこの国は、現在でも英語を公用語としていて、学校教育もその影響下に置かれているわけである。

英語教育の偏重は、英語の時間割が多いのみならず、社会科や数学の時間でさえ、使用言語がほとんどが英語であるという事情にも表れている。入学1年生の時から、教師はほとんどの時間を英語で話し、英語で板書し、生徒はそれをノートに英語で筆記するというように、授業は進行する。卒業後、上級学校への進学を希望すれば、英語での入学試験を受けなければならない。最初から最後まで、学校は英語漬けである。

第二の特色としては、キリスト教関係の科目が毎日組まれていることである。月曜から木曜日までの「キリスト教教育」は聖書の朗読や賛美歌の練習の時間であり、金曜日の朝7時45分からの30分間は、先生と生徒が教会の活動について話し合う時間である。パプアニューギニアでは植民地時代にキリスト教の布教が始まり、今では多くの地域でその教会が生活の中心部に根を下ろしている。そのキリスト教会は布教をする傍ら、宣教師たちが中心になって西欧的知識を植え付ける教育をしてきた歴史がある。その歴史は無視することはできず、現在でも学校教育に反映されている。

学校で習うキリスト教関連科目は、単なる教養の域を越えていて、実学的意義がある。日曜日ごとの礼拝は言うに及ばず、地域社会の係わる様々な行事には最初にミサが捧げられる場面が多く、この機会とばかり生徒たちは賛美歌を歌う。小さいときからの賛美歌の学習を通して、人々はキリスト教に馴染んでいると言えるほどである。

第三の特色は、学校が近代国家のなかの一機関として設立されていることに関連している。国民国家を打ち立てたあらゆる国では、国民を統合する機関として学校教育を制度化してきた。学校教育が国家理念を植え付ける思想教育の場として、あるいは国民統合を果たすための知的機関として設立された歴史は、日本をはじめ多くの国で見ることができる。そのための国家意志を反映する特別なカリキュラムが組まれることがあったが、他方で、西欧で展開した近代的知識の教授を行うという性格も、あらゆる国で共通して見出される。数学や理科など、普遍性を追求する科目が存在するのは、そのためである。ワシラオ小学校では合計で210時間と、他の科目に比して数学の時間が多いのが目立つ。ここには、近代的知的施設として学校が位置づけられている、という特色がある。

この第三の特色と関連させて言えば、社会科や理科、あるいは保健などの科目も近代的知識を授ける道具と見ることができる。社会科は、地域社会や国家の仕組みに直

接関わる教材であるから、国家が望む国民像を直接的に映し出していると言える。とりわけ小学校の高学年にまで進むと、生徒の理解力に合わせて国家作りの骨格を説明する内容が盛られるようになるので、この種の研究題材として教科書の分析は好都合である。そこで、学校での教科書を検討し、どのような知識が教授されているか考えてみよう。この村の学校でも、パプアニューギニア教育省（Department of Education）で作成された、次のような教科書が使用されている⁴⁾。主な教科書の題目と簡単な内容を紹介してみたい。

Land and Life in PNG（4年級）

地勢。動植物。ニューギニア各地の景観。

Transport in PNG（5年級）

輸送手段の今昔。

Early Times（?年級）

先史時代の生活。農耕生活。ハイランダーと沿岸部の生業。

Using Our Resource（?年級）

鉱山資源。高地の資源開発プロジェクト。

National Government（5年級）

国会議員の選挙。中央政府の組織と機能。国旗と国章。

The Resources of PNG（5年級）

土地と森林・鉱物資源。

Government in PNG（6年級）

通史的にみた伝統的な、もしくは植民地時代の行政組織。現代の国会組織と中央政府の役割。州政府の意義（地方分権 decentralisation 政策）。

Money（6年級）

貝貨から始まって貨幣の歴史。現代の通貨。銀行の役割。

The Story of our Past（7年級）

先史時代。植民地時代。第二次世界大戦。独立。

Papua New Guinea: Its Land and People（7年級）

自然環境と土地利用。

People and Places（7年級）

村落生活の成り立ち。ソマリア、インド、イギリスの村落。ポートモレビーの都市コミュニティ。

Families（7年級）

家族の意義と類型。社会と家族。結婚と家族問題。

社会科の教科書は身の回りの地理，歴史から始まって，しだいに新興国家の成り立ちを教える内容となっていて，あわせて家族などの現代的問題にまで進んでいく。全体としては，近代国家としてのパプアニューギニアをいかに生徒に教えるかに関心が払われている，と言える。すでに先行研究が指摘しているように，パプアニューギニアの教育体系は「基本的には西欧の制度と哲学のもとにあり，西歐式の経済に役立ち，西歐式の知識の伝達に連動している」(Romaine 1992: 78)。

近代社会を扱う科目は，「保健」にも見ることができる。例えば，5年生の教科書は2冊用意されていて，目，耳，鼻，歯，頭などの病気の簡易な処置を扱った教科書とともに，タバコ，酒，ビンロウの害毒を指摘する教科書も採用されている。メラネシア人の日常の嗜好品として喜ばれるビンロウは，最近では喉頭ガンを誘引する発ガン物質として宣伝されるようになってきているが，学校教育は一早く近代医学の知識を広めようとしている。こうして保健・衛生の観点から，学校は近代化教育の拠点になっている。

最後に，第四の特徴として，こうした近代教育の補完として実科教育の「農業」が組まれていることが挙げられる。わずかな時間とはいえ，金曜日の午後に組まれたこの授業では，生徒たちは学校の菜園で果樹その他の栽培に励むことになっている。その収益は生徒たちに，例えば運動具代として還元されることから，子どもたちの楽しみ場ともなっている。ほとんどの家庭が農業を営んでいて，その知識は親から得ることができるので，教師は何も農業指導をする必要もなく，その状況からすれば余分な授業，あるいは娯楽性の強い科目という印象を与えやすい。しかしながら，この授業は別の意義を持っている。学校教育も生徒を取り巻く生活環境から完全に遊離しては成り立たず，人々が農業に依存している現実を反映せざるをえないわけである。その事実を，近代知を教え込むことを基調としていても，現実の生活実体を無視しては教育が成立しえないことを物語っている。

これに関連して言えば，しばしば授業が戸外でもたれる例があり，その機会に教師は生徒と一緒にナカナイ族や近隣社会の風俗習慣を話し合う場を設けている。伝統的な婚姻儀礼や母系トーテム制度などが話題に上り，児童の関心も呼び起こされる課外授業ではあるが，これなども，学校教育のカリキュラムもまた現実の生活基盤を無視できないという例である。

Ⅳ 国家の教育，村の学校

ワシラオ小学校の社会科の授業では、伝統と現代を対置させ、*Money* という教科書を用いて近代社会の仕組みを教えたり、*Government in PNG/ National Government* という教科書を通して民主主義の仕組みと理念を教えたりする教育がなされている。このほかに、数学などの教科目をあげれば、近代の知識体系の基礎は十分に与えられることになる。近代的国家としてのパプアニューギニアを生徒に教え込もうとする教師の努力は、ただ授業での営みだけでは終わらない。何人かの教師は、教室の壁にパプアニューギニアの世界との係わりを図示するポスターを張り巡らすことで、近代を教え込もうと熱心である。

例えば、3年生の教室にはパプアニューギニアを中心に据えた世界地図が張られていて、世界の大都市の名前が太字で書き込まれている（表2）。その都市はアメリカ、オーストラリア、ヨーロッパのものであり、それらと並んで、日本の東京と大阪とがその地図には書き込まれている。小学校3年生の水準では、世界地図の認識が簡単なのは当然であるとしても、さしあたり、この描写から二つの事実が指摘される。第一に、欧米に比重が置かれた世界認識が強調されていることである。教師自身の個人的指向性があるにしても、英語を媒介として宗主国オーストラリアの世界認識が直輸入されていると、その記述から読みとることが可能である。その事実は、今なお植民地的状況が健在であることを告げている。第二として、欧米のほかにアジアでは日本だけを記している書き方が印象的である。日本との関係が深いのは、第二次大戦でパプアニューギニアが日本軍の戦場になったという体験的事実にもよるが、欧米とともに日本が記されているのは、明らかに経済関係を基礎においた世界認識を生徒に吹き込む意図があつてのことである。その教室には、またパプアニューギニアの輸出国が図解されたポスターが張られている（表3）。そのポスターを見て、例えば銅などの産

表2 小学校3年生の教室に張られたポスター、「世界の都市」

パプアニューギニア	: ラバウル, ラエ, ゴロカ, ポートモレスビー
アメリカ	: サン・フランシスコ, ロス・アンジェルズ, ニューヨーク
オーストラリア	: ブリスベン, シドニー, キャンベラ, メルボルン
ヨーロッパ	: スtockホルム, ハンブルグ, アムステルダム, ロンドン, パリ, ミラノ, ボルドー
日本	: 東京, 大阪

表3 小学校3年生の教室に張られたポスター，「輸出国」

E.E.C.	: コブラ， コーヒー， ココア， ゴム
イギリス	: 茶， 除虫菊， コブラ， コー ヒー
日本	: コブラ， 魚， 木材
アメリカ	: コブラ， ゴム， 木材
オーストラリア	: 木材， ゴム， コブラ， コー ヒー

品がない不思議さは問わないとして、この表を通して分かることは、経済関係を通して世界とパプアニューギニアとの係わりを知らせようとする教師の姿勢である。

このようなポスターは、壁に張られた絵画と同じく、生徒にとって格段に意識されることはない代物かも知れない。しかしながら、このよう

な知識も知らず知らずのうちには生徒に感化を及ぼすはずで、外国についての情報源の乏しい社会では有効な教育手段として価値がある。何気ない教師の日常活動にも、パプアニューギニアを近代世界との係わりのなかで教えようとする教師の営みが表れている。

教室に張られたポスターといえば、ほかにもいくつか見られる。そのなかには端的に学校の教育方針を掲げたものもある。すでに見たように、ワシラオ小学校ではキリスト教と英語の比重が大きいという特色があり、その特色を織り込んだうえでの近代教育が目標であった。ここに興味ある資料がある(第4表)。それは、5学年の教室の壁に張られたポスターで、この学校の教育目標を掲げた標語が書かれている。

標語とはあくまでも目標達成のための歌い文句であるから、この壁に張られた標語も学校側の目指す努力目標にすぎない、と言えるかも知れない。しかしながら、この標語は先の時間割に見られた教育方針を見事に要約している。英語、数学、キリスト教を柱としたカリキュラム編成は、こうして日常的にも生徒の目に触れながら、強調されている。いやがうえにも、生徒にとっての日常性は教室空間に埋め込まれている。

表4 5年生の教室に張られたポスター

目的	: 子どもたちを道徳的に、身体的に、社会的に、精神的に発達させること。
目標	: 1 すべての子どもの学科知識を向上させる。 2 十分な知識の宗教教育を与える。 3 子どもたちの態度や行動が社会的に高く評価されるようにする。 4 高水準の英語が話せるよう奨励する。
対象	: 学年末までに、すべての子どもは次のことを習得できるようにする。 1 英語の読み書きと会話が正確にできるようにする。 2 四則(加減乗除)の計算を使って数学の問題が正しく解けるようにする。

それならば、学校側の用意する知的操作活動を生徒側はどのように受けとめているのであろうか。

ここで、この地域の言語地図を想起していただきたい。この近辺で話されている日常言語はナカナイ語、アタ語など多様であるし、教師もパプアニューギニアの各地から赴任して来ているので、学校内で飛びかう言語は複雑である。このような状況では、各自が在地語を使う限り、学校内の会話は成立しない。たいていの人々が話せる言語といえは、ピジン英語がある。このピジンを使えば、日常会話で意思の疎通が図れないという事態は避けられる。ところが、授業で使用される言語は公用語としての英語であり、英語の方がピジンより格式が高い言語ということで、教師も英語を多用する。英語学習を強調する建て前から言っても、英語の多用は避けられないことである。

1983年に制定された「教育法」では、それまでの英語偏重教育を修正し、「英語」、「数学」などを除いた「非主要科目」での在地語授業を認めている。その背景には、ブーゲンヴィル島民（北ソロモン州）やエンガ族（南ハイランド州）が試みた教育での「分権化」運動がある。すでに70年代に、ブーゲンヴィルでは小学校のカリキュラム編成権を州政府の管轄に置き、在地語を導入しての授業が取り入れられていた。政治の水準での地方分権意識が、教育面でも地域色、もっと正確に言えばエスニックな水準での特色を生み出していた。地方分権政治を標榜する中央政府としても、こうした動きに同調せざるを得ない社会的事情があったからである。

これに対して、複雑な言語構成をとるワシラオ小学校では在地語の取り込みは不可能であった。もっとも学校の授業で、実際に、時としてはピジンも使用している。しかしながら、使用テキストは英語で書かれているし、教師自身が英語教育を受けてきて英語を得意としている背景もあり、教師の立場からする英語使用の便利さは疑えない事実としてあった。中学への入学試験は英語で出題されるという事情もあり、こう

して勢い、英語偏重の教育は続行していかざるをえなかった。

当然予想されるように、このような状況は、すべての生徒にとって満足をもたらすものではなかった。入学したての、ABCの初歩さえも知らない生徒にとって、英語での算数の授業は苦痛そのものであったに違いないし、実際に苦痛を申し立てる子どもは少なくはない。こうして、入学早々から脱落していく生徒が

表5 ワシラオ小学校生徒数
(1992年9月現在)

学 年	生徒数
1	44
2	38
3	26
4	23
5	21
6	16

現れてくる。表5は、1992年当時の、ワシラオ小学校の在籍生徒数を表している。それによると、1年入学時の生徒数は44人、それが4年生ではほぼ半分、卒業時の6年生徒数は3分の1以下の数値になる。この在籍数の極端な減少は、入学児童の数が年によって増減があるというのではなく、学年が進むにつれて生徒が学校から脱落していくことを意味している。

確かにパプアニューギニアでの生徒の就学率は高くない。1970年代においてさえ、全国平均では、入学した生徒のうち、6年間の過程を終えた者は7割程度にすぎず、中学進学者は25パーセント、12年の過程を終了した者は8パーセント、大学卒業は1パーセントにすぎない（Bray 1984: 10）。このように全国的にも、就学率は低いのだが、それにも増して、ワシラオ小学校での生徒の脱落率は高い数値を示している。この数値は異常とも思えるほどである。

生徒が学校から脱落していく理由は、もちろん英語が不得手というだけではない。生徒たちには学校からの脱落を釈明する理由があるし、学校側もその釈明への反論もある。校長の言い分は、こうである。すなわち、「脱落する生徒は怠け者だ。それに、子どもが学校に来なくなるのは、親が怠けているせいもある。親が子どもに畑仕事をさせたり、育児の手伝いをさせたりして、学校には行かなくてもよい、と言っている。とくに、女の子は結婚してよそに出るから教育は必要ない、と言っていて、ふまじめだ」と。あるいはまた、こうも言う。すなわち、「政府は生徒一人当たり20-30キナほどの援助をしているので、親は1年に10(現在では25)キナの授業料を払うだけである。それなのに、その10キナが高いと言う。いい加減な話だ」と。

これに対して、怠け者扱いにされた生徒にも反論はある。曰く、「英語の授業は分からないし、つまらない。さぼっていると、先生は棒で尻を叩くので恐かったし、校庭の草刈や大木の切り倒しをさせられるので、学校に行くのはいやになった」と。このようにして脱落した生徒は、大人たちに混じって農作業をし、あるいは狩猟に参加し、または大人たちの談笑に耳を傾け、村人の一員として伝統的な生活技能を身に付けながら、日常生活を送っている。村の生活は、最近になってやっと換金作物が導入されたばかりで、市場経済の荒波にはさほど曝されてはいない。こうした状況では、村で一生を送る限り国家社会を論じなくても暮らしていけるわけで、学校での知識や技能は無くても生活は可能である。脱落する生徒を迎え入れる環境は、いつでも用意されている。

子どもの教育といえば、かつての厳しい禁忌を失いながらも、伝統的な若者宿の習慣は今だに機能している。この施設に滞在していれば、村の少年たちは大人に混じり、

世間話に耳を傾けながら、村で生きていくうえでの生活の知恵を学ぶことができる。かつては、割礼を終えた男子のみが寝泊まりできたのに対して、今では幼児も、そして女でさえも出入りが可能になったことで、若者宿はかえって身近かな存在になっている。学校教育とは次元の違った知識と技術を再生産していく場合は、このように保たれている。

将来を考えれば、市場経済の浸透は避けて通れず、一定の知識水準とそれに伴う技術の習得は必要とされることであるから、学校からの生徒の脱落現象は大きな社会的問題にならざるを得ないのは必至である。脱落していく理由はどうであれ、この村の小学校、というよりもパプアニューギニアが抱える大きな問題は、生徒の大半が英語による学校教育についていけないという事情に原因を持っている。学校教育ではパプアニューギニアの社会や文化、地理や環境について詳しい知識が与えられるにもかかわらず、新興国家の将来を考えると、低い就学率を抱える現状は大きな問題点を残してしまうに違いない。近代的知識を血肉の通わない英語教育を通してしか与えることのできない難しさが、ここにはある。

加えて、小学校卒業後の中学校（ハイ・スクール）への進学率が低いという現象も、教育の大衆化を阻む原因になっている。中学校に入学するには厳しい試験を通過する必要があり、数少ない小学校卒業生のなかでも、すべてが進学できるものではない。進学できなかった生徒、そして脱落した子どもは、少数が町での職業訓練所に行くにしても、それ以外の大多数は村に留まって農業を営むことになるし、またそれで当然と考える人々も多い。産業構造の未成熟さに起因して、地域生活圏の拡大が阻まれている背景があり、それが学校教育を停滞させる原因になっている。

しかしながら、近代知を教える学校は、村落水準での伝統を決して否定するものでなく、かえって共存を図っていると思える節がある。確かに学校では近代の衛生思想を教え込もうとし、ビンロウの害毒を教えているけれども、授業は知識の授受の場でしかなく、生活の場でこのような近代的知識の実践を押し進めるものではない。顔や手足に入れ墨をする習慣は存続しており、日本では明治の頃に野蛮な習慣として排撃された歴史があったのとは対比的に、この習慣の存在に対しては、この地の学校は決して異を唱えない。言い換えると、村落の伝統的な習慣や知識の体系を維持したまま、学校での知識の体系は存在している、と言った方がよい。両者は排除し合うことなく、共存しているとさえ考えられる。村落生活にしっかりと根付いているキリスト教を取り上げれば、さらに両者の関係ははっきりとしてくる。

キリスト教の布教は決して古いものではないが、現在では、単に日曜日の礼拝だけ

でなく、多様な機会にキリスト教は顔をのぞかせていて、人々は一週に何回も賛美歌の練習に明け暮れている。このような現実を直視すれば、学校でのキリスト教教育と村落での生活とは、互いに補完し合っているとさえ言える。学校は近代的知識の導入も図るが、その反面、農業の実習などを通して伝統的知識の体系にも考慮の余地を与えている。とすれば、学校教育は先祖からの生活世界に敵対することなく存在していることになる。学校教育が十分に定着しない現実の背景には、近代的知識と技能を發揮しえない社会的制約があるとともに、新興国家の理念を歌い上げることに先だって、学校それ自体が祖先伝来の世界に包摂されているという図式が存在していたのである。

おわりに

今まで記述してきた事柄を、違う表現で整理してみよう。伝統的な「民俗-知」の世界は、近年の市場経済の浸潤にあいながらも、このナカナイ族では未だに保たれている状況にある。その「民俗-知」は、若者宿などで生活することによって、子どもたちは体験を通して身に付けていったし、今でもその機能は失われていない。このような状況の世界に、近代的な知識と技能の修得という国家からの要請が義務的になされた時、多くのあつれきが生み出されていく。近代の教育とは、小学校という学習空間を設定し、読み書きを主体とした勉強の場を設定することで存在意義を持っている。しかも、国家による教育は、国家統合の要に教育を位置づけることによって成立している。とするならば、国家による近代の教育とは、「国民」という均質な成員を作り出すことに目的があると言える。この意味では、国家の与える知識は、村落という生活空間から飛躍した、いわば記号化した知識にほかならない。

こうした国家の要請に村人がどのように対応するかは、興味深い考察を必要とする。将来の出世をもくろんで、教育をエリート養成の場として活用する戦略を採用するのも一つの方法である。ナカナイ族の村にも、実際に高等教育を目指し、将来は教員になれるよう努力する子どもがいることは、確かである。しかしながら、圧倒的多数は「伝統-知」の世界に意心地のよさを見出している。記号化された知の体系よりも、生活体験に基づく知の重要性の方が意味を持っているからである。今後、この両者の関係がどのように展開していくのか、注目される場所である。

注

- 1) ナカナイ族はおそらくは近隣社会から付けられた名前であって、自称はロソである。しかし、ここではナカナイという名称が慣用語になっているので、この用語を踏襲した。
- 2) ここでは便宜上、コミュニティ・スクールもプライマリ・スクールも「小学校」という名称を当てている。
- 3) このプライマリ・スクールの名称は、Lalopo Primary School。1994年に設立され、八年制の小学校。ただし6年級までの授業料は25(キナ)、7、8年級は200(キナ)であり、また7年級への進級にはテストがあり、実質的には6年制の小学校にハイ・スクール(中学校)が接続していることになる。実際に、7年級への進学でふるい落とされる生徒もいる。ワシラオ小学校よりも規模が大きく、通学児童もさらに広域から来ている。ちなみにラロポ小学校の教員構成は、1994年当時、ナカナイ族4人、ブカ島民1人、トーライ族5人であった。
- 4) バブアニューギニアの教科書は立教大学の豊田由貴夫教授から借用させて貰った。感謝したい。

文 献

- Brammal, J. and R. J. May (eds)
 1975 *Education in Melanesia*. Canberra: The Research School of Pacific Studies, The Australian National University.
- Bray, Mark
 1984a *Dropping Out from Community Schools: The Extent, the Causes and Possible Remedies*. (Eru Report No. 49) Port Moresby: Educational Research Unit (University of Papua New Guinea).
 1984b *Educational Planning in a Decentralized System*. Port Moresby: University of Papua New Guinea Press.
- Bray, Mark and Peter, Smith (eds)
 1985 *Education and Social Stratification in Papua New Guinea*. Melbourne: Longman Cheshire.
- Romaine, Suzanne
 1992 *Language, Education, and Development: Urban and Rural Tok Pisin in Papua New Guinea*. Oxford: Clarendon Press.